

UIFA JAP●N

NEWSLETTER

■主な内容

バリアーはありませんか？

ド・ラ・トゥール会長を囲む会開かれる

特集ザ・インタビュー -住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団 松田妙子氏-
小さなできごとから

UIFA大会へ向けての大きな期待と小さな野望

日本の心と木造建築 -自然との共生-

「UIFA '98第12回日本大会」への参加

ドキュメント7 -第12回UIFA日本大会に向けて- (1998年01月24日~1998年02月28日)

海外交流の会

■バリアーはありませんか？

UIFA '98の準備着々と進んでいます。

3/22、ド・ラ・トゥール会長の訪日は、慌ただしく、しかし大会の打合せは詳細に渡った。夜の歓迎パーティの前、午前中から生活構造研究所をお借りして、松川実行委員長、中原会長、小川副会長などが対応した。ド・ラ・トゥール会長は、日本大会の成功を心から祈っており、打合せは様々な範囲に及んだ。進行状況、東京の地図、言語の障壁への心配、見学等への注文、ホームステイ、招待者リスト、横浜シンポジウム、パネリストの選考、さらには、コーヒープレイクのお菓子の有無まできめこまかいご指導であった。

さて、大会への参加状況はまだ途中の段階ですが、5月末の登録の結果を待たず、すでに外国からの登録が始まっています。

日本の参加者の登録も始まっていますが、早期登録を進めてください。また、発表、展示も準備して下さい。

さて、外国からのメッセージの中にアクセスフリーか否か、バリアフリーかなどの状況を知らせてとの要求があり、実行委員会では関係会場の調査を始めた。

本来これらの情報は第2サーキュラーに載せる情報であったらうと思うがなかなかパーフェクトにはいかない。

実行委員会の調査によると、対象のホテルは車椅子対応はあっても宿泊代が実に高い。またシャワールームにも問題はありそう。また見学予定の各施設のうちアクセス不可もあれば、人力要といったコメントもある。世界レベルでの評価はいかに。日本の現実世界に通用するか。点検のチャンスと考えたい。

福祉のまちづくり条例もあって、公共施設は比較的整備が進んでいるようだが、いづれにしても日本の状況は、河内美彦氏の著書にあるように「バリアフル日本」のようである。ソフトとハードのバリアをなくす！大会参加者の心ある対応が求められる。

(渡辺喜代美)

■ド・ラ・トゥール会長を囲む会開かれる

去る3月22日(日)来日中のド・ラ・トゥール会長をお呼びして、半蔵門のふくおか会館で会長を囲む会が開かれました。出席者はド・ラ・トゥール会長と通訳を務めてくれた北本さんのお嬢さんを含め24名、しばし歓談の時を過ごしました。

ド・ラ・トゥール会長はUIAとJIAの主催による「長野冬季オリンピック記念開催セミナー」の発表者の一人として来日されたもので、「長野は寒かった」とおっしゃっていました。

ヨーロッパのUIFA会員達は日本大会にとっても期待していて、40人位の団体で来るつもりだそうです。また、次回開催国が決まっていないうのを気にされて「どこが良いと思うか」とさかんに訊いておられました。候補としてはヴェニス、オーストラリア、メキシコ等が挙げられているそうです。ホームステイのホストやホステスが何語をしゃべるのかということも気にされていました。

囲む会の前には事務局とド・ラ・トゥール会長との最終打合せも行われ、会議の具体的な詰めも進みました。

翌朝帰国ということであわただしい時間を割いての一時でしたが、ド・ラ・トゥール会長となじみの少ない会員も、その気さくなお人柄の一端に触れることができたのではないかと思います。

(東 由美子)



特集ザ・インタビュー —住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団 松田妙子氏—

シリーズ第4回のザ・インタビューは、住宅産業研修財団及び生涯学習開発財団理事長の松田妙子氏です。霞ヶ関の住宅産業研修財団理事長室にて、中原暢子会長、実行委員会の山本基親代、広報担当の渡辺喜代美と田中厚子がお話を伺いました。



中原：UIFA国際会議にご支援を頂きましてありがとうございます。UIFAは1963年に設立された女性建築家の集まりで、80を越える国の女性たちが、交流の場をもって共通の課題に取り組んでいるということによってやっております。今回の会議のテーマは環境ですので、今日は21世紀の環境をどう考えるかを伺いたいと思います。

松田：今、私は2つのテーマで、良い住まいについて考えています。4月中旬に刊行される「家をつくって子を失う」という本を読みたいのですが、日本中流住宅史について、子供部屋を中心に書きました。郊外住宅、集合住宅、住宅設計競技、住宅博覧会等も含まれております。日本では良い家とは何かということや、何のために家を持つかということが明確でないのです。35年前に住宅産業に関与してから、ハードばかりみてソフトをおろそかにしたのではないかと危惧しまして歴史を勉強しました。確かに戦後瓦礫の中からスタートした当時は、政府の政策もまあ良いのですが、例えば持ち家を推奨したことが果たしてよかったのかどうか分かりませんね。それと同時に、最近の30年間はそれ以前の遺産を食べているだけで、殆ど住むための住まいについて考えてこなかったと思います。生産性を高め、洋風化を推進してきましたが、その結果として今の社会状況が起こったのではないかと考え始め、不登校、家庭内暴力の家庭の実態調査をしました。驚いたことに、問題児を抱えている家庭が全部アッパーミドルクラス（中流の上）です。69%が持ち家で、両親は高学歴、母親は専業主婦です。昔は仕事をする女性がいろいろ言われたものですが、今は違います。高学歴のうえに暇ですから、頭でっかちになり、子供に煩く指図してしまうのでしょうか。家は家族の幸せの入れ物というのが私の命題です。それと家は子供の人格形成の場でなければいけない。昭和58年と60年に、「新住宅」が建築家の「あなたにとってすまいとは」というアンケートを特集していたのですが、誰一人として子供の人格形成の場であるとは言っていませんでした。建築家は大きな近代建築を設計したいが、住宅なんて所詮、といった風潮がありましたし、家なんて仮の住まい、という言葉も聞きました。そういう気持ちが日本人の心の奥底に潜んでいるのかなと。21世紀を迎えようとする今、一番大切なのは、

未来を背負う青少年ではないかと思えます。そのために造り手も住み手も、何のための住まいかを考えて頂きたいというのが、私の一つのテーマです。

もう一つ、温暖化がこれだけ叫ばれて2012年には6%に削減しなければならぬと具体的に決めた訳ですね。残念ながらエネルギー消費の40%は建築業界です。ではそのために何をするかという時にデータがないのです。ですから私は、温度、湿度、風、雪など全国の気候の600万のデータをインプットしてベースを作りました。

中原：気候にあった建築をつくるためですね。

松田：今までのような、例えば金融公庫が全国を6つに区分けしたのがありますが、あれはコスト高になります。日本の伝統的な建築を見直すべきだと思いますので、庇の長さ、角度などを配慮して設計しなければ駄目だと思うのです。これからは世界でも気候データがつくられるのではないのでしょうか。

中原：そのデータベースはいつ頃でるのですか。

松田：あと数か月です。それから、来年からは、活断層や高低などの地形についてのデータのソフトを作ろうと思っています。地域ごとに景観や地質をデータ化したものはありますけれど、気候を加えたものはありません。津波や土砂崩れも平均値をみれば大体わかります。健康と住宅という面では、一寸贅沢ですがその土地にあった木造というのが一番いいでしょうね。豆腐に目鼻の建物は苦手です。

中原：最初に建築に興味を持たれたのは、日本の住宅の貧しさをどうかしようと思われたからだと聞きますが。

松田：貧しさと値段の高さですね。自分の家を持つと思ったときに、自分の年代の人達はどうするのだろうと思いました。私は建築の素人ですが、村野先生や吉坂先生に特別建築士をあげようとからかわれたくらいです。誰のためにやるかということと日本のためと家族のためですね。私は人間が好きですから。そして日本が好きです。日本をよくしないとイケませんね。昔の町並みと、日本の伝統住宅を評価したのはレイモンドやコンドルやヴォーリスですね。私の河口湖畔の別荘はライトのスケッチで遠藤新がアシスタントでつくったのですが、自然に溶け込んでいます。昭和7年に建てたものですが、今でもしっかり建っています。ハードな面と自然との共生、そして家族の為の家ということを強調したいですね。それから、昔の家には規範がありました。躰があり、遠慮があり、それらが形から入った無言の教育があったのです。男女平等の運動が起こったのは明治からですが、その頃はまだ昔からの名残がありました。家族本位や台所の改良はいいと思います。陽の当たるところに家族の部屋というのもいいです。しかし、日本の住宅のすべてを否定したのはどうかと思います。古いものはすべて封建的で全部切り捨てて、床の間から玄関からみんな要らないと。玄関はなくなり、今では単なる靴脱ぎ場ですね。

中原：玄関も作れない狭さです。

松田：家を所有したいという気持ちも問題ですね。戦前は73%借家でしたから。これからは賃貸住宅を増やしたほうがいいです。昭和

47,8年頃に「所有より共有へ」ということをずいぶん雑誌などに書いたのですが、人はやはり家をもちたいのですね。

中原：今また共有へということがいわれておりますね。

松田：私は子供に何も残さなくていいと思っています。自分の力で生きる満足感の方が大事ですよ。

中原：子孫に美田を残さず、家をつくって子を失うな、ですね。

松田：今の住宅で、ドアと鍵の問題がありますね。私は、自分の子供を育てる時の改装でドアはすべて引き戸にしました。車椅子も入るし、掃除も楽だし。それを住宅公団はプライバシーという言葉を使ってみんなドアにしてしまった。私は個室反対論者ですが、最近の住宅は、玄関からパッと鉄砲階段で2階の自室に行けるものが多いですね。私は思うのですが、子供が学校から帰った時に母親の顔を見ずに2階にあがってもらっては困ります。それからバリアフリーの住宅について、95歳以上の方向百人かを調査しましたら、居心地のよい個室を一階にもらうことが必ずしも老人の健康に繋がらないのですね。また、階段が13段ですと、滑って落ちたときに下まで止まりませんが、18段にすると楽です。そういうことをクリエートしなければいけません。

中原：建築家に対してどんどん意見をいっていただき、今度の国際会議の場などで話し合っていきたいですね。さて、次なるご関心はどのようなことですか。

松田：私の一番の関心は匠、技の世界です。前から気になっていたので勉強して書いてみようと思っています。それから、加賀友禅のプロセスを昨日見てきたのですが、日本人の文化は高度ですよ。色にしてもわびさびの色とかね。それから私の趣味の一つは料理です。20分で9品目というのを研究しているのです。私は一食に9種類食べることにしていますので。

中原：生涯学習開発財団についてお聞かせください。

松田：エージレス社会を主張しています。常に新しいことにチャレンジし、もう年だからなんて思わないようにする。それにはいくつまで生きて、どう社会の役に立とうという決断が大事なのです。もう一つ、今、私はベトナムの160人の子どもの母なのです。そこでは教育ママをやっています。私は3人子どもがおりますが、どの仕事よりも子育てが一番うまかったといわれたことがありますね。

子育ては母親の責任だと思います。もちろん一人でいることもいいのですよ、つまらない結婚をするよりもね。もう亡くなりましたけれど、私の母は津田の10期生でした。その母から「あなたは女性だからといって無理に結婚することはありません。特別におなりなさい。」と言われて育ちました。戦後アメリカに行くことを決めた時にも、「何か目的をもって行きなさい。英語だけ上手くなっても通弁などというものは職業ですから」と言われました。人が言ったことを伝えるだけでは、何のクリエイティビティもない、と。そういう家に育ちましたから、男女の差別なんて一切ありませんでした。

渡辺：「アメリカで恋と仕事」というご著書を書かれていますね。

松田：主人という立派な人に出会えて幸せでした。

中原：それが今のご活躍に繋がっているのですね。

松田：私が子ども達に言ったのは、結婚相手を見付けるなら差別をしない人にしなさいということです。

渡辺：差別をしない人というのは素晴らしい哲学ですね。

松田：建築に携わる皆さんには是非、自然と共生して、CO²削減を目指した建築を造って頂きたい。それと家造りを通して人づくりをするということ、そして将来のエージレス社会を目指したい。今まで私はマクロな視点に立ちながら小さな事をやるというスタンスでやってきました。今、政府の政策は5年計画などといいますが、私は50年後を見据えて日本はどうあるべきか、どうあって欲しいかを皆さんに考えて頂きたいですね。もし、50年前に一人でもそういう事を考えた人がいたら、今のような無様な日本にはならなかったと思います。今、高齢化と騒ぐのなら、熟年用産業をつくれればいい。少子化といいますが世界的にみれば世界が食べさせられる人口を大幅に上回っています。日本は分相応の国というものを考えないと、間違ってしまう。皆さんプロの女性建築家として、マクロに日本はどうあるべきかを考えて仕事をさせていただきたいですね。

線だけひいていけばいいのではなく、国を創る、国をデザインする、世界をデザインする、そして街を、家をデザインするということをお願いしたいと思います。そして一番の根幹は住まいです。私はあくまでも生活者であり、行動する人間ですから、私が勉強を始めたのは今こそ歴史家の言葉に耳を傾けるべきだと思ったからです。中でも昭和3年に「日本の住宅」を書かれた藤井厚さんには影響をうけました。それから女性では大江すみさんですね。

中原：私、その大江さんが創られた家政学院におります。亡くなられた時に立ち会いました。

松田：立派な方に出会われてお幸せでしたね。あの方の著書は皆読みました。女性のたしなみを踏まえた上でのプロですね。たしなみというものは躰からではなく、例えば尊敬していれば自然に相手をたてますね。そういうものだと思います。私は以前、「主婦としての義務をどう考えますか」と質問されてびっくりしたことがあります。家庭のなかの仕事は義務と思ったことはありませんでしたから。好きだからやるものではありませんか。今は長幼の序なんていう言葉もなくなってしまいましたね。私は90歳までプランがあります。今70歳ですが、人は70になってから今までの蓄積の花が開くのではないかと考えています。

中原：本当にそうですね。いろいろ元気が出るお話をありがとうございました。（記録、写真担当：田中）

松田妙子：

住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団理事長

中原暢子：

UIFA JAPON会長、東京家政学院大学教授、建築家

■小さなできごとから

平井美蔓

針の穴から天を覗くというのはちょっと大ききかなと思いつつ、昨年夏、シニア対応商品と深く関わる機会があった。軽度の脳内出血のため、歩行に若干後遺症が残る程度の70代男性（某材メーカー）からの自宅浴室の改修工事依頼である。ホテルマンとあらば、浴室に関しては一言以上のものを持っているだろうと直観しながら、シニア対応浴室の特集雑誌を改修資料として受け取った。そしてその掲載商品を各ショールームで見聞した。が、施工技術的に適応する商品は皆無。つまり2×4工法の2階に納まるものがない。雑誌情報はすべて戸建対応商品であった。290mm以内で浴室床下を納めなければ一般床と同レベルの浴室床は得られない。T社にマンション用ユニットバスの開発商品があることを知り、施工態勢を含めると、私にはこの1つの場合しか提供できない現実を知った。これを選び取るかどうかはユーザーと当製品とのインターラクティブな感覚であるとして、T社ラボにて施主夫妻と現物を徹底的に検証する手続きを採る。そして製品は美しく現場に納まった。

ところが、ユーザーマインドにはすんなり納まらなかった。まず洗場湯水栓のシニア対応取付位置は、下半身への思いやりから腰掛けを使う高さで、壁に洗面器用台が取付けられている。洗場を広く使いたいので台・腰掛けとも取り除きたいとの要望。湯水栓の高さはと訝る私に「私はまだ腰掛けを使用せねばならぬほど歳をとってもいないし、不自由じゃない。でも明日には必要になるかもしれない」と笑顔のセリフ。次はシニア対応設計のシャワーヘッド。肌に優しく配慮されているためきわめて優しい水圧になっている。夫妻共々豊かな毛髪を指し示し地肌まで湯がまわらないと嘆く。ごもつとでもすと従来のマッサージシャワーヘッドに取替。そして床仕上げ材の保水状態。排水しきれない水が床面に残る。FRP樹脂型材石目調の床パネルには細かい凹凸があり滑りにくさを足裏に感じさせるが、そのために、たつぷりと盛りあがるように保水する。この問題はユーザーとしては製品を引き取ることは出来ないというところまで発展してしまった。そのためT社の技術陣に説明と対処を求めたのであるが、床材の物性と保水の関係については十分な説明はなく、暖房換気扇を取付ける対処となった。

気がつけばバリアフリーデザインという言葉は既にユニバーサルデザインに置き換えられ、生涯数々のステップを通る人間のために幅広い対応が求められている。人とそれを取り巻く環境、社会、文化、精神の調和を考え直す時がきている。21世紀を目前にして環境問題の比重が刻々増しつつあることを実感する日々。環境破壊という代償を払っての経済発展、ハイレベルの消費といった行為は熱帯雨林の破壊とオゾン層の変異による地球の温暖化を深刻なものにしている。対立する関係にある経済発展と環境保護を調和ある関係に戻す方法論としての、環境負荷を減らすデザインの概念〈サステイナブルデザイン〉の実例-バイオスフィア2・プロジェクト-等を興味深く見守る昨今である。

(アトリエM)

■UIFA大会へ向けての大きな期待と小さな野望

高橋 満季

「今日的で女性の会議らしいテーマで面白そうだな」「活動を始めたばかりの私たちにはとても参加は無理だ」所属する建築士会の役員より、UIFA日本大会の話聞いた瞬間、こんな2つの思いが、私の中で弾けた。

環境共生というテーマが女性の会議にふさわしいと思うのは、この所、葉害エイズの問題、厚生省の老人福祉に絡む汚職、廃棄物の不法投棄、ダイオキシン対策の遅れなど、従来の仕組みや組織が、今の社会問題を解決するためにうまく機能していないように感じるからだ。私たち働く女はなんとかその中で、ある一定の地位を占めたいと願い、長年努力してきた結果、彼らの考え方ややり方を身につけることになった。しかし、一方で私自身、企業に所属していた時から、何か納得できない別の思いをかかえていた。男性と女性を対立関係と捉えるつもりはないが、従来の仕組みや組織が、男性主導型社会であり、健常者主体、強者主体の社会であったことは確かだ（特に建築の世界は顕著だった）。ただ、その仕組みが問題解決に支障をきたしている今、10数年前の男性主導の女性活用論とは違い、私たち女性自らが地に足の付いた考え方や意見を表明し、かつ、それらが現実の問題解決に生かされた経験を共有できる機会として、今大会の意義は大きいと考える。そして、私は、環境問題先進国の発表はもちろんのこと、開発途上国の女性たちがこのテーマにどのように取り組み、どんな発表を行うのか、とても関心がある。

ところで、私の所属する全日本建築士会は、『木』という素材にこだわり、日本固有の風土に根ざした建築を守りつつ、住み手と共に考える住づくりをめざそうとする、会員約2000名の会だ。今年、秋、40周年を迎える。女性会員は、40名足らず。そして、女性フォーラムは、昨年の9月に産声をあげたばかりなのである。

UIFAへの参加について少し重い気持ちで、「検討してみます」と答え、メンバーの会合にはかったところ、想像以上に関心が高く、その勢いに押されるまま、実行委員会に加わることになった。

このように、私は当初、自分や士会が主体的に関わることに消極的であった。最近の会合でUIFAの実行委員会の様子を報告し、日本大会への参加について再度はかったところ、士会のこだわっている『木』という素材は日本の誇るべき文化であると同時に、環境共生というテーマに欠くことのできない要素と考えられるので、是非、発表か展示で参加したいとの声が強くなり、早急に独自の課題を設定し、取り組むことになった。これは、私の全く想像していなかった展開であった。今は流れに逆らわず、やれるところまでやってみようと思っている。更に最近、私の心の中にある野望が芽生えていたのを発見し、驚いている。「この課題の研究活動を通して、まだ女性フォーラムに関心をもっていない女性会員や、何ができるんだと見ている多くの男性会員に興味を持ってもらい、私たちの士会の中にも、新しい環境共生の風を起させたら」と。

(全日本建築士会 女性フォーラム代表)

■日本の心と木造建築 —自然との共生—

吉田 真澄

それは3年前の夏の暑い日のことだった。新宿のビルに囲まれた、そのお寺は、忘れていた少し昔に舞い戻ったような佇まいで、静かに建っていた。

門を入り、しだれ桜や紫陽花の葉なみの中に子育て地蔵が並ぶ参道を進むと、青銅屋根の塔上に、相輪を頂いた本堂が現れる。石畳の境内の傍らに、「夏休みラジオ体操」と子供会の立て看板が立っている。

木造数寄屋造りの客殿・庫裏へと向かう。水が打たれた路地の竹垣の角を曲がり、数段の石段を上がると、玄関の格子戸が一寸開けられている。

案内された部屋には、一昔前の冷房のない日本の夏が待っていた。池のある中庭に面した窓には、簾が下がり、廊下の葎簾の夏障子から心地よい風が、吹き抜けている。そして、時間がゆっくりと感じられる中で、御住職が心のこもったお茶を点ててくださった。

私への依頼は、このお寺の歴史・環境を継承し、木のぬくもりや、今では失われつつある日本の伝統をできるだけ残した、檀家や御近所の方々のための、数寄屋造りの客殿と、これまでと変わらない生活ができる庫裏を増築したいというものであった。

頑固なまでに、昔ながらの質素な生活を続けている御住職は、多少の不便さは感じることはあっても、そのことと交換できない大切な日本の心を守っていきたくて思っているのだ、と強く感じた。

確かに、日本人らしい、季節の移り変わりを生活の中で愛でる心、やさしい繊細な気配りで客をもてなす心、家族や近所の人たちを敬い、暖かく見守る心、日本の文化・伝統を受け継ぐ心、物を大事にする心を、現代社会・生活において、昔のように伝えていくことはむずかしい。

それから3年、何とか御住職のご要望に応えようと、秋田の杉や吉野の檜などの木材を探し歩く一方で、棟梁・職人の意見を聞きながら、設計に没頭する充実した毎日を過ごすことができた。

この仕事を終え、私が得たものは大きい。これからは、住宅の設計において、日本の気候にあった木造建築にみられる、洗練された日本の意匠や技術、材料を伝えていくことを通して、日本の心をもっともっと大切にしていきたいと考えている。

本来、日本人は、自然の恵みの中で、自然との結びつきを大切にしながら季節を感じ、文化を築き、自然と共生してきた。その日本の心を育てる環境作りには木造建築があると言える。

21世紀に向かって、日本の心を、そして、日本の風土にあった木造建築の良さを見直す運動を進めていけたらと思っている。

(株) 吉田デザインコーナー

■「UIFA '98第12回日本大会」への参加

宮本 伸子

第12回日本大会の開催もいよいよ目前となってきましたが、実行委員会について先頃から参加し始めた私には、何でも新鮮という感じで、かねてより苦勞をして来られた方には申し訳ないのですが、今のところ楽しみながら参加させて頂いています。国際会議は大仕事だと、頭の中ではわかっていても、いざ現実となると本当に色々あって、結局、だれかがどれかを分担して頑張る必要もあって、そういう意味では、まだまだ人手は沢山いるのだ！ということかなと思います。

ところで、会議への参加にも色々あって、実行委員を初めとするサポート役はもとより、発表や展示への参加、海外から来られる方へのコミュニケーター、そして一般参加などなど。何れの立場でも問題となるのは言葉で、語学音痴を自認する私などに何が出来るのか？とも思いますが、そこは度胸と愛敬？で乗り切るのが肝要と割り切っています。

私が現在所属するのは、おもてなし部会。まさにヒューマンインターフェイスで、いかにみんなが楽しく快適に過ごせるようにするかというのが、最大の課題だと思います。言葉も大事（ちなみに例の英語研修に参加していますが、4月位からはもっと生徒が増えて、色々なモデル会話ができれば良いと思います）ですが、筆談、百面相での談、ボディランゲージ、とにかく伝えられれば、50点はもらえるのでは。そして何よりも大事なのが、もてなしの心なのではないでしょうか。例えば、料亭の女将さんの心意気、茶事を催す亭主の心栄え、そこまではいかないかもしれないけれど、我々会員みんなの真情が伝わるように、企画は綿密に、実行は柔軟にというのをモットーにいければと考えています。

もうひとつ、展示と発表については、東京建築士会女性委員会のひとりとしての参加を予定しています。この発表は、基調発表ということになりましたし、大会のテーマを念頭におき、10年以上にわたる女性委員会の活動の歴史を振り返りながら、大都市東京における人と建築や都市の関係について、近年の活動を中心にまとめ、内容を検討しているところです。あわせて、初めて東京に来られた海外の方に、東京という都市からの歓迎のメッセージと若干のインフォメーションになればとも考えています。

最後に蛇足ですが、自分自身が「国際」と名の付く財団に在りながら、国際社会とはメディアを通じてのお付き合いしかないのが日常。そんな人でも、どんどん参加できると良いと思っています。

(株) 国際技能振興財団

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5
麹町E・C・Kビル ㈱生活構造研究所内
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

■ドキュメント7 -第12回UIFA日本大会に向けて-

(1998年01月24日~1998年02月28日)

1月16日 トステム助成決定。

1月24日(2時~5時)第12回実行委員会、カムライナリウム。21名。
総務部会(1/9) 広告、2nd. キュラ、サイマルとの問題解決法、助成金、次のpco の決め方、等検討。日本大会収支報告。広報部会・デザイン部会(1/9/12/21) 2nd. キュラ 作業再開。(12/22) 発送データ 整理作業再開。(12/26) 2nd. キュラ 日本語原稿確認。(12/27) 2nd. キュラ 翻訳開始。(12/31) 2nd. キュラ 日本語原稿、登録票等確定。(1/8) 表紙、紙質決定。(1/14) A5版用封筒形式確定、発注。(1/16) 翻訳確定。印刷部数3千部決定。広告掲載依頼文書確定。プログラム部会第10回(1/11) 2nd. キュラ 最終校正チェック、今後のスケジュール、オープニングパーティ内容等確認。報告書の作成、記録の作成、予稿集、スピーチ(世田谷・墨田)等検討。おもてなし部会(1/17)各パーティ、会議中のコーヒープレイクと昼食、横浜シンポジウム、東京湾クルーズ、エクスカッションA・B、ポストコングレスツァ、記念品、コングレスバッグ等の内容の確認役割等検討。(1/19) NEC本社見学。(1/26) 記念品、コングレスバッグ等美濃部商店にて打ち合わせ。

1月27日 ユニオン財団助成申込。

1月28日 2nd. キュラ 印刷上がり。UIFA'98第12回日本大会について、事務局にて記者発表会。48社へ案内送付。出席9社。1/29掲載、建設工業・建設産業・建設通信。2/5 掲載、建設通信。2/18掲載、日本経済新聞。

1月29日~2月3日 2nd. キュラ 発送。

2月5日 都市計画学会(戸沼幸市会長) 後援許可。

2月9日 横浜記者発表。朝日新聞田園支局・神奈川新聞出席。

2月27日 2nd. キュラ の申込書の返送が始まる。

2月28日(2時~5時)第13回実行委員会、カムライナリウム。33名。
総務部会 収支報告、全体スケジュール、分担変更と確認、pco 越前氏の提案書と見積、広告掲載申込みの進捗状況等の報告。横浜担当部会横浜市民公開シンポジウムの提案。広報部会(1/28)東京・(2/9)横浜での記者発表へ出席。学会・協会・専門団体等機関紙への記事掲載依頼報告。

デザイン部会 大会ポスター、風呂敷、コングレスバッグ、展示会場用看板等提案、

及び検討。プログラム部会(2/15)予稿集、スタディツァ墨田、全体的問題等打合せ。報告書・記録作成検討。(2/18)案内看板等、UIFA概要・歴史、等について検討・提案。おもてなし部会(1/26)歓迎パーティについて、都庁議会議棟1階カフェテリア『伊勢丹プチモン』にて、打合せ。(2/9)横浜公開シンポジウム・レセプションについて打合せ。昼食コーヒープレイク、各種パーティ、レセプション、エクスカッション、ポストコングレスツァ、記念品、コングレスバッグ等について役割担当報告と細部提案。

■役員会の報告

第10回役員会(98年01月24日 12時~13時50分) 役員6名出席。

第11回役員会(98年02月28日 12時~13時50分) 役員11名出席。

■海外交流の会

—ジルケ・フォートクさん・六反田千恵さんが語る

「ドイツのまち・日本のまち」—

9月のUIFA日本大会のテーマ“環境共生時代の人・建築・都市”に沿って、3回のテーマ強化シリーズとしての勉強会を計画しています。その第1回〈都市と環境〉編として、杉並区役所都市整備部で、博士論文執筆のため研修中のジルケ・フォートクさんに、お話をお願いしました。たくさんの配付資料を用意されて、OHPを利用したドイツの都市計画システムの説明。日本の住居地域に該当地域の住宅の配置の仕方の決まりの説明は、日本との違いが際立っており興味深いものでした。スライドによるボンの街並みや広場の紹介、日本の街との違い等。又初の試みとして、コメンテーターとのトークを後半に計画し、春日部市の都市計画マスタープラン策定委員会の委員でもある六反田千恵さんをお願いしました。“まち”についてもドイツと日本の考え方の違いが、浮き彫りにされたトークでした。参加者22名。

なお、5月9日(土)には第2回〈人と環境〉編、7月には第3回〈建築と環境〉編の勉強会を計画しています。



■広報だより

さくらの花ひらき、うれしい季節になりました。いよいよUIFA'98の準備も佳境に入り、実行委員会の皆さんも熱が入ってきました。

一方、理事会は、6月の総会準備に入っています。開催は、6月13日(土)です。日程に入れて下さい。

今号のザ・インタビューは松田妙子氏。ほんとうに70才ですかと聞いてしまった。心の若さとエネルギーにあふれ、エイジレス社会への先頭に立つチャンネルスーツの似合う素敵なお方でした。

担当：飯島、川嶋、渡辺、田中、大高